

JTU きょうと教組

日本教職員組合

NEWS LETTER

2018年11月1日発行 No.100
 京都府教職員組合 小鍛治 啓
 Kyoto School Staff Union
 Tel: 075-252-6771
 Fax: 075-252-6772
<http://kyoto-union.net>



学びが 深まった！！

きょうと教組 第29次教育研究集会

10月20日(土)、きょうと教組教育研究集会が行われ、2本のレポート報告と1本の資料提供がありました。小雨が降る少し肌寒さを感じる中でしたが、青年層から退職後の任用までの幅広い層の組合員、また日教組和歌山からの参加者を迎え、学びの深まりと人のつながりの温かさが感じられた教育研究集会でした。

報告① 「セクシュアルマイノリティであることと 教職員であることを切り離さないこと」

城陽高校 土肥いつきさんのレポートは、「セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク」(以下、stn21)の歴史と現在、そして stn21 の存在が明らかにしてきた学校における課題についてでした。自分よりふさわしい人がいるが、休止状態だった stn21 をこの2年間活動を再開させてきた経緯から私がレポートしますとことわった上での報告でした。

2010年の文科省通知(*注)、2012年の「LGBT 調査 2012」を契機に、教室の中のセクシュアルマイノリティの子どもたちの存在が顕在化されるとともに、とりくみの重要性が認識し始められています。しかし、教室の中同様に職員室にもセクシュアルマイノリティがいることは忘れ去られがちです。職員室の中のセクシュアルマイノリティが「いない」ことにされているような学校で、教室の中でセクシュアルマイノリティの子どもたちが「いる」ことは可能なのでしょうか。今から17年前の2001年に①〈孤立した「当事者」の教職員がつながり、情報を交換し、各自の現状や問題点、教育実践などを共有すること〉②〈多様なセクシュアリティ〉をテーマに加えた性教育や、人権教育を実践している教職員との連携、交流〉が必要として、「生きることの根幹にかかわる性のあり方、その多様性をキーワードに教育を変革」することをめざし、緩やかなネットワークとして stn21 は設立されました。その活動の元にあるのは、「教室の中にいるセクシュアルマイノリティの子どもたちをうつむかせたくない」という思い、そして「セクシュアルマイノ



当日はビデオ報告となりました

リティであることと教職員であることを切り離さないこと」でした。しかし、そのふたつを切り離さなくてはならない現実が17年経った今もあるのです。

「自らのことを隠さざるを得ないがために、自らにかかわる学習ができない。それは、例えば部落差別と同じです。・・・部落出身者であることと教職員であることを切り離さないで教育に取り組んでこられた歴史があります。存在そのものが否認されてきたという意味では、例えば障害者と同じです。・・・障害があるからこそできる教育活動があることを、自らの存在をもって示してこられた歴史があります。stn21は少しずつ歩みを進めてきていますが、セクシュアルマイノリティであることと教職員であることを切り離すことのない学校・社会を作るために、まだその役割は終わってないように思います。私たちとつながってください。私たちとつなげてください」と訴える報告でした。

*注 文科省は「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底」を出し、性同一性障害のある児童生徒が学校に存在することを示すとともに、相談体制を充実させることを求めた。

報告② 「しんどい子も含めた すべての生徒の学びを保障する学習」

京都八幡高校 竹花惇さんのレポートは、「すべての生徒の学びを保障したい」と取り組んでいる現在進行形の授業改革の実践報告でした。

「これして何になるの？」という思いで授業時間をやり過ごす生徒がいます。表面的には課題がないように思えても、内側に課題を抱えている場合も多く気になります。「どうせ・・・」といったあきらめの中、自分が向上するという希望を持ってないでいる。学びを深めることが自分の将来につながる、自分の将来を豊かにするという発想がない状態なのです。自尊心が低くあきらめに直結してしまう。社会的な排除が自らを排除してしまう状態になっ



てしまっているといった問題もそこには見えてくる・・・。そんな負の連鎖のような課題を抱えている生徒を目の前にし、「学びが自分の将来を豊かにする、その力が自分にもある」という思いが持てるような授業が必要だと考え、取り組んだのが、「学びの共同体」(*注)の実践を参照にした授業改革の取り組みでした。それは、高校での一般的な一斉授業ではなく、「聴き合う」関係が生まれるような授業形態の工夫(グループで課題に取り組む)、そして、グループみんなで解決に向けて関わり合うことができるような課題の設定の工夫でした。様々な事情で、常にこの形態で授業を計画することができなかったり、生徒が慣れるのには時間と回数が必要なのですが、学習の内容をグループで共有し合うために「聴き合う」ことで、グループ内で生徒どうしが徐々にコミュニケーションを取るようになりました。わからない生徒に対してわかるように説明したり、また、わからないところを教科担任に尋ねるのではなくグループのほかのメンバーに聴くようになるなど、グループの生徒同士が関わり合いながら課題に取り組む姿